

正四位下兵部卿安倍朝臣首名 一首【年六十四】

五言春日應_レ詔_ス

世_ニ頌_シ隆_平、_レ德_ニ
時_ニ謠_フ交_泰春_ヲ
舞_ニ衣_搖樹_影
歌_ニ扇_動梁_塵
湛_露重_仁智_ヲ
流_霞輕_松筠_ニ
凝_靡賞_無倦_レ
花_將月_共新

隆平、交泰、交泰なるが故に隆平。隆平なるが故に交泰。字異なり、義は同じ。
頌すれば謠ふ、謠ふは頌す。舞衣妙なるが故に、樹影搖なり。歌扇巧なるが故に
梁塵動くなり。湛露は君恩の厚きを言ふ。『詩經』小雅百華の篇に、湛_{タル}露_ス。匪_{アラザ}
陽_レ不_レ晞_カ。厭_厭夜_飲。不_レ醉_無歸_ル。重_仁智_、恩_は重_し。流_露即_ち景_は輕_し。凝_、
靡_賞無_倦、花_將月_共新、花は今日に盡きず、更_に新_{なる}ものあり。此の詩前半は
稍々可なり、後半は寢語の如きものなり。

從二位大納言大伴宿彌旅人 一首〔年六十七〕

五言初春侍宴

寬^{ニシテ}政^ヲ情^ニ既^ニ遠^ク
迪^レ古^ニ道^ニ惟^レ新^{ナリ}
穆^{タリ}穆^{タリ}四^ノ門^ノ客^ニ
濟^{タリ}濟^{タリ}三^ノ德^ノ人^ニ
梅^ノ雪^ノ亂^レ殘^ニ岸^ニ
煙^ノ霞^ノ接^ス早^ニ春^ニ
共^ニ遊^フ聖^ノ主^ノ澤^ニ
同^{シク}賀^{スル}擊^ル壤^ノ仁^ニ

寛政、政刑を寛にするは上古の法なり。而かも上古は遠し。上古遠しと雖も、道は惟新。穆穆は深遠の貌。四門、宮門は東西南北の四門より入る。天子が羣臣を召すときは、羣臣も亦客と呼ばるゝなり。濟濟は『詩經』大雅の篇に、濟濟多士。文王以寧とおほく盛んなる形容語。三徳は智仁勇なり。以上四句は、天皇と臣下とを並せて言ふ。梅雪の十字は初春の景色を言ふ。早春なれば梅花に尙殘雪が岸上にあり。而かも春の景色としては、煙霞の氣分が已に表はれ居る。而かも我等は、此の澤に因て、共に御苑に遊び、同じく擊壤仁を賀し、且謠ふ。是れ喜ぶべきなり。聖主の恩篇は意味貫通して、支離滅裂の病少なし。首名に勝ること萬萬とす。

從四位下左中辨兼神祇伯中臣朝臣人足 二一首〔年五十〕

五言遊_フ吉野宮_ニ

惟_レ山且惟_レ水
能_ク智亦能_ク仁
萬代無_ニ埃_ニ全_ニ
一朝逢_ニ柘_ニ民_ニ
風波轉_タ入_レ曲_ニ
魚鳥共_ニ成_ス倫_ヲ
此地即_チ方丈
誰_カ說_ク桃源_ノ竇

山_、と水_、とを以て智_、と仁_、とも組合すは、此の時代の通行と思へるなり。吉野_、は神武天皇が行宮にし玉_{かりみち}ふより、天智、天武時代にも行宮が在りしものならん。萬代無埃所、古訓に「埃所無ク」とあり今は「埃無キ所」と訓む、神武以來無埃塵の地にて清淨極まり無し。一朝逢柘民、此の意義明白ならざるが考ふるに吉野は所謂神靈の地なるに、一朝民生が茲に來りしより、遂に風波_、が曲_、に入り、魚鳥_、も倫_、を成すに至るとならん、而かも此の池は所謂方丈即ち仙山なるは事實なり。桃源_、、武陵を説く者は方丈の眞を知らずとなり。

仁山狎_レ鳳閣_ニ
智水啓_ク龍樓_ニ
花鳥堪_ニ沈_ニ翫_ニ
何人不_カ淹_シ留_セ

鳳閣_、、龍樓_、、共に宮禁を言ふ。此の仁山_、、智水の境に、天皇が遊び玉ふ行宮が

あるなり。

花も好し、鳥も好し。春日賞翫すべし。誰が淹留の念を生ぜざらんや。

大伴王 二一首

五言從_テ駕_ニ吉野宮_ニ應_ス詔_ニ

欲_{シテ}尋_ニ張騫_ノ跡_ヲ

幸_ニ逐_フ河源_ノ風_ヲ

朝雲指_シ南北_ヲ

夕霧正_ス西東_ヲ

嶺峻絲響急_ニ

谿曠竹鳴融

將_ニ歌_ニ造化_ノ趣_ヲ

握_テ素愧_ヲ不_レ工_{ナラ}

人足と同時の作なるやも知れず。大伴王は傳未檢。張騫は『漢書六十一』に出づ。漢中の人、建元中、郎と爲る。而して月氏、匈奴、單于、大宛、康居、大夏、是の諸國間を來往する十三年。行く時百餘人あり、漢に還るとき、唯二人のみ。乃ち知る、騫は塞外の地理を究め、所謂南北、所謂西東、所謂嶺峻、所謂谿曠、而して朝雲、而して夕霧、必ずや其の變化を見しものならん。而かも我は今此の吉野に於て透化趣を歌はんと欲するも、筆澀り、之を握ると雖も、工妙の詩を得ざるを愧づとなり。

案ずるに、張騫の塞外に使用する、眞に嶮山、眞に危谷を經歷し來るものなり。九死に一生を幸にしたるもの。「從駕吉野宮」、悠悠と文酒の宴を開く、貴游の状態なり。事何ぞ張騫と關せん。沒交渉も甚し。知らず作者の心事、果して何の推敲する所あるや。古谿案ず。天漢支機石。黄河上流。乃ち芳野を以て神仙の宅、景勝の地と爲し。河源に譬喩したるものか。

山幽仁趣遠_ク

川 淨 智 懷 深
欲^{シテ} 訪^{ント} 神 仙^ノ 迹^ヲ
追 從^ス 吉 野^ノ 澗^{ホトリ}

徹頭徹尾、兒童語を以て填め、何等評すべき事無し。

正五位下肥後守道公首名【年五十六】

五言秋宴一首

望苑商氣艷
鳳池秋水清
晚燕吟風還
新雁拂露驚
昔聞濠梁論
今辨遊魚情
芳筵此僚友
追節結雅聲

題目記載なし。察するに大伴王と同じく吉野に遊びし作ならん。望苑、鳳池宮禁内の事。商氣は秋氣なり。晚燕、新雁字の如し。昔聞濠梁論、今辨遊魚感、莊子惠子と濠梁の上に遊ぶ、莊子が曰く儵魚游出從容、是れ魚樂しむなり。惠子が曰く子は魚にあらず、安んぞ魚の樂を知らん。莊子が曰く子は我にあらず、安んぞ我が魚の樂を知らざるを知らん。

從四位上治部卿境部王 二首【年二十五】

新年寒氣盡
上月霽光輕
送雪梅花笑
含霞竹葉清
歌是飛塵曲
絃卽激流聲
欲知今日賞
咸有不歸情

此篇も題無し、而かも遊宴の作たる明らかなり。上月は元月又は上春に同じ。霽光以下皆早春の景色、飛塵曲は歌聲の美なるを言ふ。激流聲は絃聲の急なる言ふ。不歸情興が盡きざるを以て、何人も歸らんと欲する者無し。

五言秋夜宴山池 一首

對峯傾菊酒
臨水拍桐琴
忘歸待明月
何憂夜漏深

菊花を酒に浸して飲む、古代衛生法なり。酒を飲み且琴を弾ず。以て明月に對して猶ほ飲み、猶彈ぜんを欲す。夜漏、即ち夜十時でも十二時でも其の深きを憂へずとなり。五絶の拗體として唐絶の正法、是の篇に於て始めて之を見る。

大學頭從五位下山田史三方 三首

五言秋日於長王宅宴新羅客 一首竝序

君王以敬愛之沖衿。廣闢琴樽之賞。使人承敦厚之榮命。欣戴鳳鸞之儀。於是琳瑯滿目。蘿薜充筵。玉姐彫華。列星光於煙幕。珍羞錯味。分綺色於霞帷。羽爵騰飛。混寶主於浮蟻。清談振發。忘貴賤於窗雞。歌臺落塵。郢曲與巴音雜響。笑林開。壓珠輝其霞影。相依。于時露凝。曼序風轉。商郊寒蟬唱而柳葉飄。霜雁度而蘆花落。小山丹桂。流彩別愁之篇。長坂紫蘭。散馥同心之翼。日云暮矣。月將除焉。醉我以五千之文。既舞踏於飽德之地。博我以三百之什。且狂簡於劔志之場。清寫西園之遊。兼陳南浦之送。含毫振藻式贊高風。二云爾。

先哲曰く、長王は恐くば長屋王なるべし、屋の字加ふべしと。天武の裔にして高市皇子の長子なり。神龜元年に正二位左大臣と爲る。聖武の天平元年に死を賜ふ。然らば新羅客を宴せしは元正天皇の時なるや、聖武天皇の代なるや、判然する能はず。君王は天子を指したるにや、長屋王を指したるにや明白ならず。客を宴する席は長屋王の宅なれど、天皇の命に依てなるや、或は長屋王の私親より出てしなるや。漢土にすれば君主は一人のみなれば、疑問は無きも、邦人は文字の使用法を知らざるゆえ、時に誤用することあり。今の君主は余は斷定せず。沖衿は傲慢の反對、心をむなくして人を柔らぐ。使人、新羅の客は使命を帶て來朝せる人なり。敦厚之榮命、新羅王より承はる所の榮命。欣戴鳳鸞之儀、儀は儀容、古文には鳳凰來儀なその語もありて、俗に言ふ目で度き太平の代のしるしあるを言ふなり。兩國の親交を結ぶの責任を載いて來た人が即ち使人なり。琳瑯は美しき玉なり。以て文才煥發の人に譬ふ。蘿薜は在野の君子や學者に譬ふ。玉姐、肴を盛る器物の美麗なるを言ふ。雕華、美麗なること知るべし。華の雕刻があるなり。珍羞、玉姐に盛る物は何ぞ山海の珍羞であるなり。星光、煙幕、綺色、霞帷、

總て座席の奇麗なるを言ふ。羽爵、騰飛、羽爵は羽觴と同じ。『晉書束皙傳』に周公成「洛邑」因「流水」以泛酒故逸詩に云ふ。羽觴隨波と。爵の形。頭尾羽翼。騰飛の義を以てする所以なり。浮蟻は酒の異名、酒を飲めば、實も主も遂には混雜して分ち難きに至る。飲めば必ず人は陽氣を發す、陰氣と爲る者は少なし。是に於て清談振發、貴も賤も眼中に無し。窗雞は『幽冥錄』に出づ。晉の袁州刺史宋處宗、一長鳴雞を窗間に置く。後雞、人語を作り、處宗と談論、極めて玄致あり。處宗此に因て、玄學大に進む。此の故事を用ゐて、以て今日會する者、貴賤を忘れて老莊の談論を爲すとなり。歌臺落塵、歌聲美にして梁塵を落す。郢曲即ち高尚の曲、巴音即ち下品の歌、笑林開闢、珠輝其霞影相依、顰笑は面白く興に乗じて笑ふ歡喜の面貌なり。露凝旻序は近景。風轉商郊は遠景。寒蟬は柳葉の飄ると共に鳴き、霜雁は蘆花の落る浦に度る。小山丹桂、流彩別愁之篇、漢の淮南王小山は、博雅好古、天下俊偉の士を招懷して、八公の徒より、咸其の徳を慕ひて其の仁に歸す。小山作る所の「招隱士」の文中桂樹叢生兮山之幽とあり。別愁之篇とは、小山は屈原の忠貞を慕つて作るもの、乃ち別愁篇の如きは至情極まる。流彩は其の技倆が發揮してある意味。長坂紫蘭、散馥同心之翼、未考。日云『詩經』の文字。醉我以五千之文、所謂玄學、『老子』は五千字なり。中唐の白樂天は、「老子」を詠じて曰く、何因自著五千文と。既舞蹈於飽徳之地、長屋王の邸を指す。博我以三百之什、老子は我を心酔せしめ、『詩經』は我をして博雅の樂みを増さしむ。詩經の數は三百六篇なればなり。且狂簡於劍志之場、狂簡は志は大にして事に麤なるを言ふ。『論語』【公治長】吾黨小子、狂簡斐然成章とあり。清寫西園之遊、後漢の靈帝中平五年に始めて西園八校尉を置き、爾來西園の遊頗る盛んなり。梁元帝の詩に、清夜侍「西園」。魏文帝の詩に、逍遙步「西園」。西園の故事一一擧る能はず。兼陳南浦之送、江文通が「別賦」に、春草碧色。春水綠波。送君南浦。傷如「之何」とあり。

案ずるに此序、字字句句、來歴を求め、毫も私に不成語を使用せず。『懷風藻』一篇中大家の規模有るものを求むれば、此等に指を屈せざるべからず。看者宜し

く意を注ぐべきなり。

白露カケル懸レ珠ヲ日
黄葉サシズル散レ風ニ朝朝
對タイ揖イフス三朝朝使
言イヒ盡ツクス九秋秋韶韶
牙水含ヲ調ヲ激シ
虞葵落テ扇ニ飄ル
已謝ス靈臺ノ下
徒欲レ報レ瓊瑤瑤

白露の十字、秋日曉天の景を言ふ。對揖は挨拶するなり。三韓なれば三朝と用ひしなり。言盡は所謂秋即ち七八九ヶ月の清韶の事を談話する。牙水含調激、虞葵落扇飄、此の五六二句及び七八、共に未考。

五言七夕 一首

金漢星榆冷
銀河月桂秋
靈姿理雲鬢
仙駕度潢流
窈窕鳴衣玉
玲瓏映彩舟
所ハ悲シム明日夜
誰慰セシ別離ノ憂ヲ

「竇泉述書賦」に、益星榆之衆象。無月桂之孤光とあり。榆は「ニレ」と云

ふ樹。月中には桂樹あり、星中には楡樹あると云ふ傳説あり。一二の句對法を以て作る、是れ老杜の正法。金漢も銀河も共に天の川を言ふ。靈姿は織女星を指すならん。織女星が今夕は大事の一年一度の禮式なれば、丁寧に自分の雲髻即ち美麗なる頭髮を撚るなり。仙駕は牽牛星即ち織女星の婿殿と見るべし。是も一年一度、今夜は潢流を度り來り、近く會見するなり。而して其の狀や如何。窈窕たる織女星、玲瓏たる牽牛星。女は衣玉を鳴らし、男は影を彩舟に移す。而かも此の權樂は久しからず、明夜は已に別離なり。夏に來年の七月七夕を待たざるべからず。其の憂を慰するものは誰ぞ。

大友皇子の詩より、此に至る五十四章なり。其の五十四章に至り、始めて唐の正法たる五律の上乗なるものを見る。平仄の整正なるは、勿論、一氣流出して、妙語渾成。良とに傑製と爲す。

五言三月三日曲水宴 一首

錦巖飛瀑激
春岫擘桃開
不憚流水急
唯恨盞遲來

三月三日は、重三、三三、上巳、初巳、三巳、と稱し、晉の世、曲水の蘭亭に會して、文を賦し、酒を飲み、且杯を水に流して以て楔事を修したるに始まり、本邦に此の祝日が傳來して、此の會を修するに至る。

曲水は日本には無き水なり。曲水に倣うて作すなり。錦巖、巖の名にあらず、春花開て美麗であるから錦巖と用ゐたるなり。飛瀑激、巖上より落下する「タキ」なり。瀧にはあらず、瀧と混合する勿れ。岫も巖と同じ。擘桃、赤き色の桃花が盛んに開く。俗に桃の節句と稱する所以なり。不憚流水急、不憚は「憂へズ」「畏レズ」などと、殆んど同義なり。飛瀑の勢急なるも、關する所にあらず。唯唯酒

の來る遲きを恨むのみなりと。此の篇拗體を以て作り、上巳の意義二十字にて足る。益、以て知る、懷風藻中第一人者なることを。